*Selatosomus gloriosus* (Kishii, 1955)

日本産ヒゲブトチビシテムシ類要説 (VI)

保科英人

〒 910-8507 福井県福井市文京 3-9-1 福井大学教育学部

先号（保科，2016c）から日本産ヒゲブトチビシテムシ亜科 *Colon* 属 *Myloechus* 亜属の解説に入った。本要説シリーズの (II)（保科，2016a）では日本産 *Myloechus* 亜属は 13 種としたが，その後ハンベエヒゲブトチビシテムシ *Colon hanbei* Hoshina, 2012 が *Myloechus* 亜属から *Eurycolon* 亜属へ移されたことはシリーズ (IV) で述べた通りだ（保科，2016b）。しかし，Hoshina & Nishikawa (2016) が *Myloechus* 亜属の 1 新種を奄美大島から記載したので，現在も日本産 *Myloechus* 亜属は差し引きゼロで 13 種のままである。

日本産 *Myloechus* 亜属は 5 種群に分けられる。5 種群のうち，*Colon hachisukai* 種群の紹介は先号で既に終えた（保科，2016c）。本稿 (VI) では，2 番目の種群である *Colon tametomoi* 種群の解説を行う。

Colon tametomoi 種群

同種群所属の日本産種はアマミヒゲブトチビシテムシ *Colon (Myloechus) tametomoi* とオオヒゲブトチビシテムシ *C. (M.) hiraii* の 2 種であるが，台湾固有種のコクセンヤヒゲブトチビシテムシ *C. (M.) chenggoni* も同種群所属種である。本稿では台湾産種も含めたこれら 3 種を概説する。

Colon tametomoi 種群の形態的

特徴は以下の通り。なお，同種群 3 種のうちコクセンヤヒゲブトチビシテムシは雄しか得られていないので，性的二型に関する記述は一切該当しないことに注意されたい。同種群の体長は 3.5 mm 以上のことが多く（稀に例外あり），ヒゲブトチビシテムシ亜科としては大型種の部類に入る。オオヒゲブトチビシテムシでは 4 mm 台半ばに達する個体もいる。背面の色は黒褐色か褐色。かなり黒色に近い体色を持つものもいる。主観まみれのフィリングで申し訳ないが，体全体がいかつく，何となく南方系甲虫のツラをしている（ような気がする）（図 1）。実際，同種群の分布の日本海側北限は新潟県，太平洋側東限は関東で，東に行くほど採れにくい傾向がある。

体型（図 2）や触角（図 3）は他のヒゲブトチビシテムシと同様で取り立てて特徴はない。前胸背板は後縁中央が後方に緩く膨らみ（図 4, 11, 12, 21, 22），性的二型は見られない（図 11, 12, 21, 22）。前脛節外縁の細かい刺は雌雄ともかなりの高密度（図 5, 13, 14, 23, 24）。後脛節には強い性的二型，そして前脛節，前附節，後脛節に弱い性的二型が見られる場合が多いが，性差が不明瞭な場合も少なくない。雄交尾器側片は横から見て太く，側片の毛は腹側と背側に程々か疎（図 10, 20, 23）。



図1. オオヒゲブトチビシテムシ *Colon (Myloechus) hiraii* Nakane.

Colon tametomoi 種群の最大の形態的特徴は中胸後側板の毛の生え際の点刻 (setal socket punctures) が大きいことである (図 7, 17, 29 中の矢印). この形質だけで *Myloechus* 亜属の他の種群との区別が可能だ. また, 次回で扱う予定の *Colon itoi* 種群と似た特徴ではあるが, 上述「前脛節外縁の高密度な刺」も *Colon tametomoi* 種群の識別に有力な形質となる.

Colon tametomoi 種群の種への検索表

- 1) 雄前附節は *Colon* 属 *Myloechus* 亜属としては例外的に棒状 (図 5). 雄交尾器側片は他の 2 種に比べて相対的に長く, 長さは側方から見て中央片の約 3/4 に達する (図 10). 分布地: 台湾.コクセンヤヒゲブトチビシデムシ *Colon (Myloechus) chenggongi* Hoshina
-) 雄前附節第 1-3 節は雌と比べて明らかに幅広くなる (図 13, 14, 23, 24). 雄交尾器側片は前種と比べ相対的に短く, 側方から見た長さは 2/3 以下 (図 20 および 32). 分布地は琉球以北.2
- 2) 雌雄とも後脛節はほぼ単純な棒状 (図 15 および 16). 雄後脛節後縁の三角状突起は次種と比較すると鋭く, また最外側近くに位置する (図 15). 雄交尾器側片の背中側の後縁は側方から見て緩やかに曲がる (図 20). 分布地: 奄美大島.アマミヒゲブトチビシデムシ *C. (M.) tametomoi* Hoshina
-) 雄後脛節は大抵強くないしは緩く内側に曲がるが (図 25 および 26), 棒状に近い個体もいる (図 27). 雌後脛節はほぼ棒状 (図 28). 雄交尾器側片の背中側の後縁は側方から見て直線状 (図 32). 分布地: 本州, 四国, 九州.オオヒゲブトチビシデムシ *C. (M.) hiraii* Nakane

コクセンヤヒゲブトチビシデムシ

Colon (Myloechus) chenggongi Hoshina, 2009

(図 2-10)

本種は Hoshina (2009) により台湾産雄 1 頭のみで記載された種である. *Colon tametomoi* 種群の一つとして本稿で扱っているが, 台湾固有種なので日本産種ではない. 本種の記載がヒゲブトチビシデムシ亜科台湾初記録であったが, その後別種や追加標本が得られたとの情報もないので, 今のところ本種の模式標本が台湾産ヒゲブトチビシデムシ亜科の唯一の公式記録標本とすることになる. そして, 以下の形態記述は当然のことながら雄形質のみに基づいたものである.

体長は 3.7 mm で, 背面は黒褐色. 前胸背板に microreticulation はなく表面は滑らか. 毛の生え際の点刻 (setal socket punctures) を含む前胸背板のほぼ全ての点刻は小さくて密だが, それぞれ繋がらずに独立している. 前脛節は単純な棒状 (図 5). 上記検索表の通り, 雄であるにも拘わらず前附節は横方向に広がらず細い (図 5). 後脛節は後方外角で三角状に突出する (図 6). 後脛節は内側に曲がらず直線状 (図 6). 後胸腹板中央五角形部分の点刻は小さくて高密度 (図 7). 雄交尾器の側片の毛は背側が程々で, 一方腹側が疎. 側片は側方から見て三角形に近い形状で (図 10), その長さは *Colon tametomoi* 種群の他の 2 種よりも相対的に長く, 中央片の約 3/4 に達する. その他の雄交尾器の特徴は図 8-10 の通り.

分布地: 台湾.

雑記. 学名および和名は満州族が建国した清朝に対し, 台湾を拠点に徹底抗戦した明朝の遺臣・鄭成功 (1624-1662) に由来する. 鄭成功は近松門左衛門「国姓爺合戦」の主人公として江戸期の日本でも既に有名な存在だった. 台湾固有の本種に不必要な和名がわざわざ付いているのは勿論筆者の単なる趣味に過ぎない.

アマミヒゲブトチビシデムシ

Colon (Myloechus) tametomoi Hoshina, 2003

(図 11-20)

本種は Hoshina (2003) により奄美大島産雄 1 頭のみに基づいて記載された種. その後, 筆者は雌標本を調べる機会を得て, Hoshina (2009) で雌形質が追加記載された.

体長は 3.8-4.2 mm で, 背面は黒褐色. 前胸背板に microreticulation はなく表面は滑らか. 毛の生え際の点刻 (setal socket punctures) を含む前胸背板のほぼ全ての点刻は小さくて密だが, それぞれ繋がらずに独立している. 前脛節, 前附節, 後脛節に性的二型が生じるが, 後脛節は雌雄とも棒状に近く顕著な性差は見られない. 雄前脛節は内縁基部約 2/5 で内側に曲がる (図 13). 雄前附節は第 1-3 節は横方向に大きく広がる (図 13). 雄後脛節後縁中央部に小さい突起が生じ, また後方外角近くで鋭く突出する (図 15). 一方, 雌前附節第 1-3 節は横方向にやや広がる程度 (図 14). 雌後脛節後縁は単純な直線状 (図 16). 後胸腹板中央五角形部分の点刻は小さくて高密度 (図 17). 交尾器の側片の毛は背側・腹側共に程々. 側片は背中側後縁が緩やかに曲がる (図 20). その他の雄交尾器の特徴は図

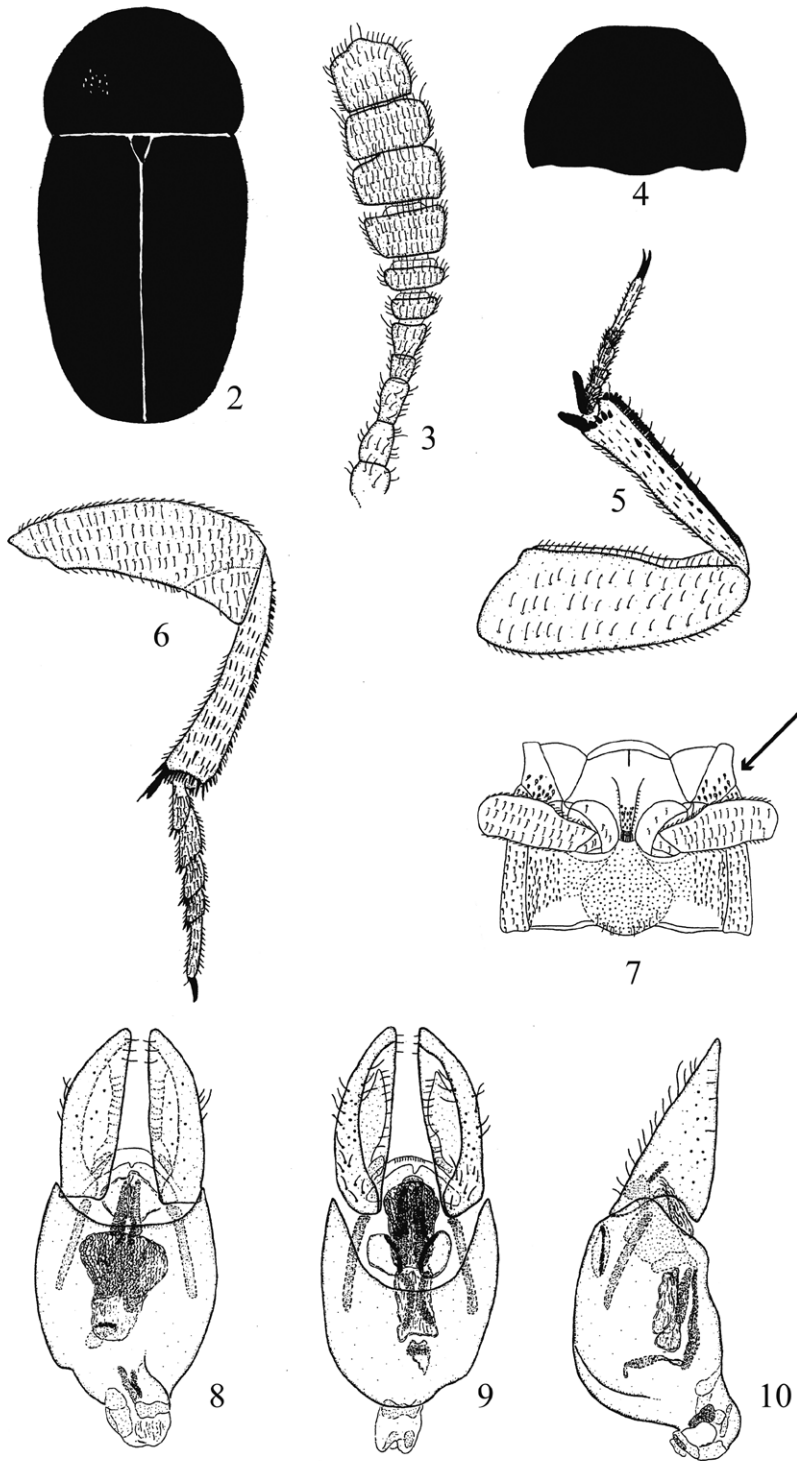


図2-10. コクセンヤヒゲブトチビシテムシ *Colon (Myloechus) chenggongi* Hoshina. 2, 全形；3, 触角；4, 前胸背板；5, 前脚；6, 後脚；7, 中胸および後胸（腹側）；8-10, 雄交尾器（それぞれ腹側, 背側, 横側）. 図は全て雄形質で Hoshina (2009) より引用.

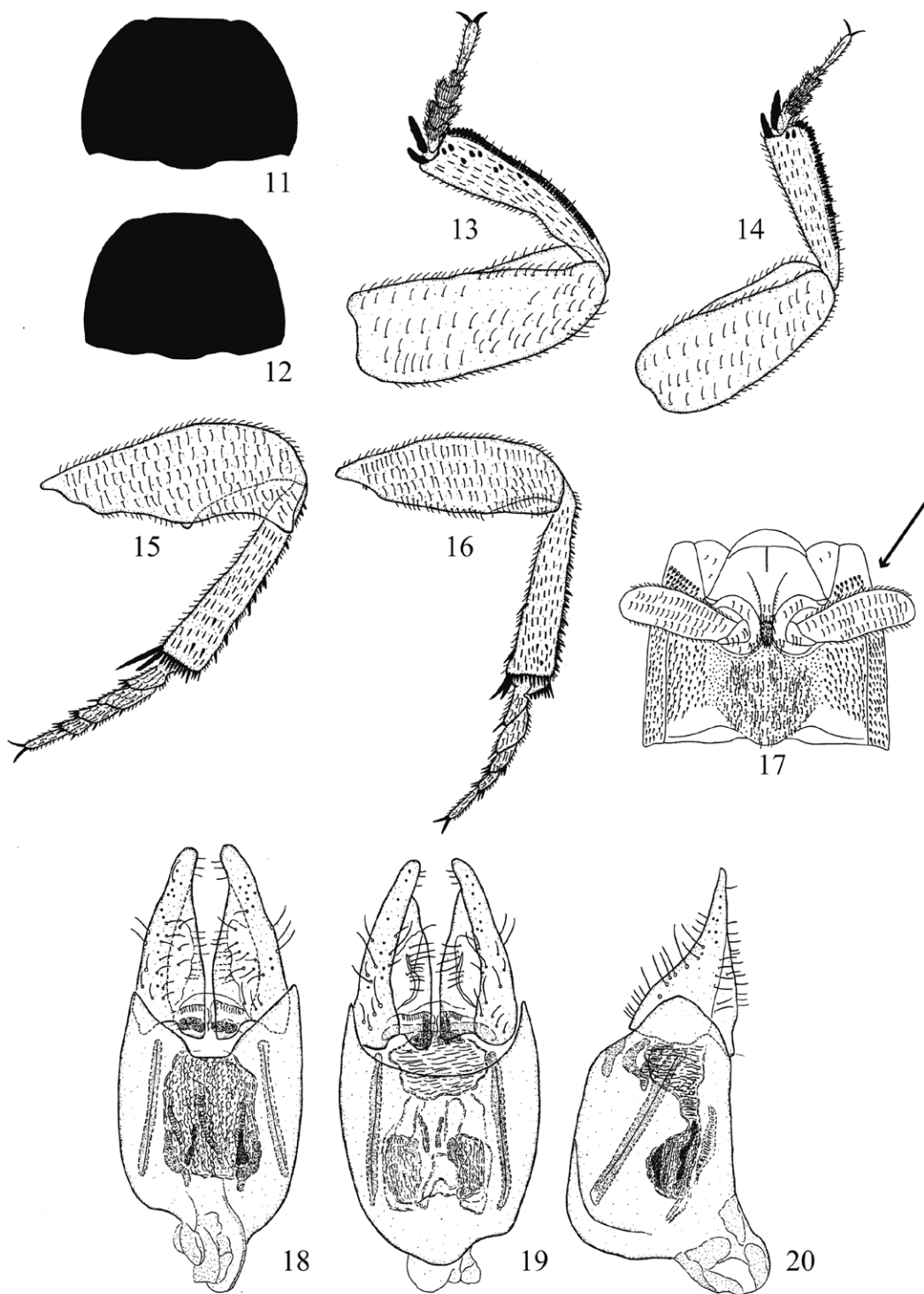


図11-20. アマミヒゲプトチビシデムシ *Colan (Myloechus) tametomoi* Hoshina. 11, 雄前胸背板; 12, 雌前胸背板; 13, 雄前脚; 14, 雌前脚; 15, 雄後脚; 16, 雌後脚; 17, 中胸および後胸 (腹側); 18-20, 雄交尾器 (それぞれ腹側, 背側, 横側). 全て Hoshina (2009) より引用.

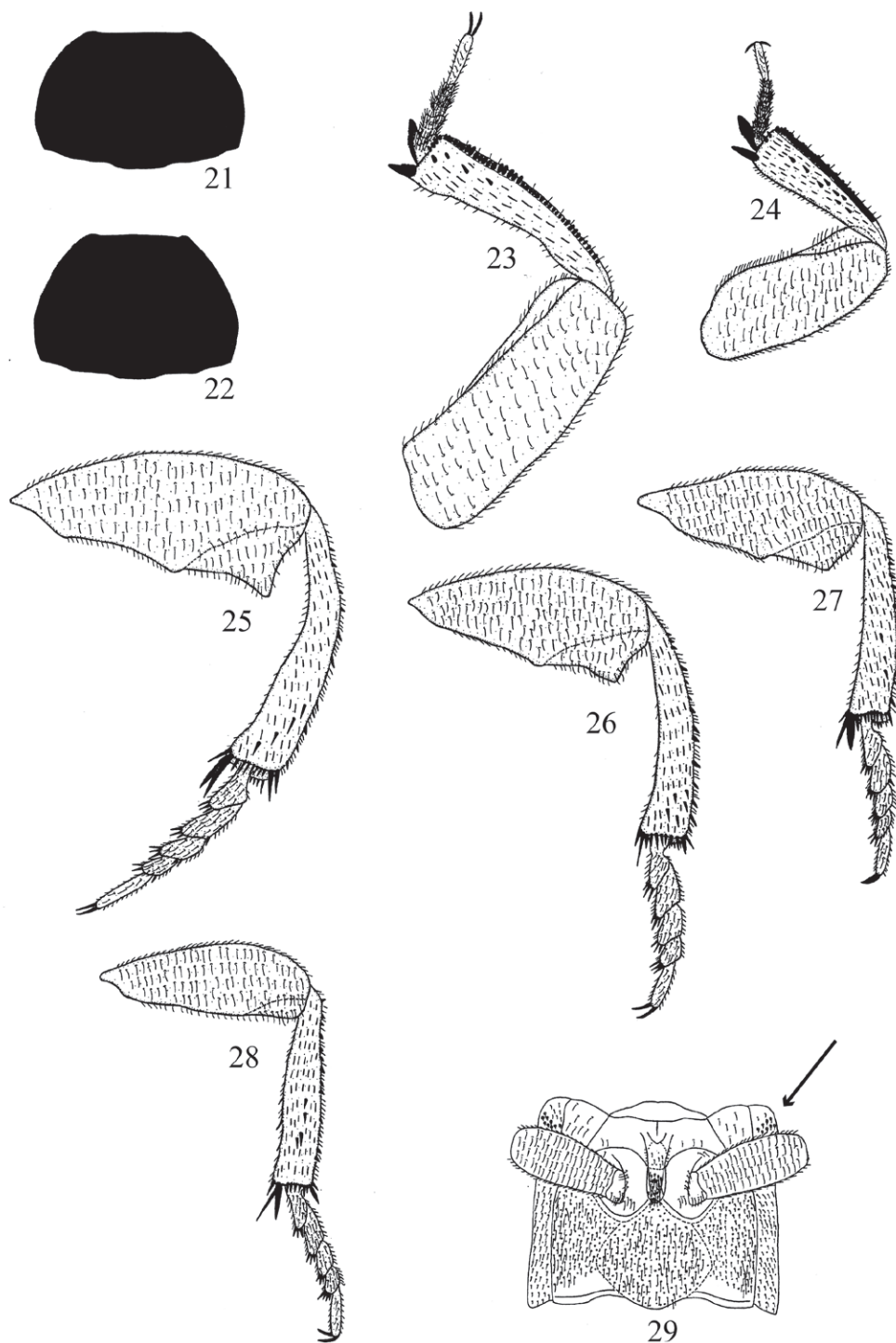


図21-29. オオヒゲブトチビシデムシ *Colon (Myloechus) hiraii* Nakane. 21, 雄前胸背板; 22, 雌前胸背板; 23, 雄前脚; 24, 雌前脚; 25-27, 雄後脚; 28, 雌後脚; 29, 中胸および後胸(腹側). 全て Hoshina (2009) より引用.

18–20 の通り。

分布地：奄美大島。

雑記。学名は保元の乱後に奄美諸島に辿り着いたとの伝説がある源平時代屈指の勇士・源為朝(1139–1177)に由来する。今のところ奄美大島のみが本種の生息地であるが、徳之島など奄美諸島の他の島でも見つかる可能性はあるだろう。

オオヒゲブトチビシテムシ

Colon (Myloechus) hiraii Nakane, 1982

(図 1, 21–32)

本種は Nakane (1982) により徳島県から記載された種で、その後各地で記録が追加され、現在では本州、四国、九州に分布することが知られている。西南日本のヒゲブトチビシテムシ亜科最普通種の一つ。

体長は 3.2–4.4 mm だが、大抵 4 mm 前後になる大型種。背面は黒褐色、稀に褐色。前胸背板に microreticulation はなく表面は滑らか。毛の生え際の点刻 (setal socket punctures) 含む前胸背板のほぼ全ての点刻は小さくて密だが、それぞれ繋がらずに独立している。原則前脛節、前跗節、後腿節、後脛節に性的二型が生じる。雄前脛節は内縁基部約 2/5 で内側に曲がる (図 23)。雄前跗節は第 1–3 節は横方向に大きく広がる (図 23)。雄後腿節後縁中央部で鈍く突出し、また後方外角からやや内側で大きく突出するが、その度合いには個体差がある (図 25–27)。雄後脛節内縁が内側方向に曲がる (図 25 および 26)、ほぼ棒状の雄個体もいる (図

27)。一方、雌前附節第 1–3 節は横方向にやや広がる程度 (図 24)。雌後脛節はほぼ棒状、雌後腿節後縁は単純な直線状となる (図 28)。後胸腹板中央五角形部分の点刻は小さくて高密度 (図 29)。交尾器の側片の毛は背側・腹側共に程々で、背中側後縁は直線状 (図 32)。その他の雄交尾器の特徴は図 30–32 の通り。

分布地：本州 (関東・新潟以西)、四国、九州。ただし、分布の東限に近づくほど採れにくくなる傾向がある。

雑記 1。上記の通り、本種の雄後腿節と雄後脛節には少なからぬ個体変異が生じる。この変異はクワガタムシの大顎のように、大凡大きい個体ほど第二次性徴が強く現れる傾向がある。例えば、図 25, 26, 27 はそれぞれ体長 4.0 mm, 3.6 mm, 3.2 mm の雄個体に基づいて描かれたスケッチである。

雑記 2。Hoshina (2009) は *Colon (Myloechus) babai* Nakane, 1982 を本種 *C. (M.) hiraii* のシノニムとした。にも拘わらず、Perreau (2015) のカタログでは、*C. (M.) babai* は独立種のみである。これは別に Perreau が筆者のシノニム処置に対し異を唱えているわけではなく、単なる見落としに過ぎないと思われる。

Colon tametomoi 種群に関する補足

1) *Colon tametomoi* 種群の生物地理

筆者の能力では琉球列島の地史研究最前線を追いきれない。生物屋が琉球列島の生物地理を考察する際、大嶋(1980)や木村(1996)、池原・加藤(1997)などを参照し、更新世初期～前期頃 (約 170 ~ 100

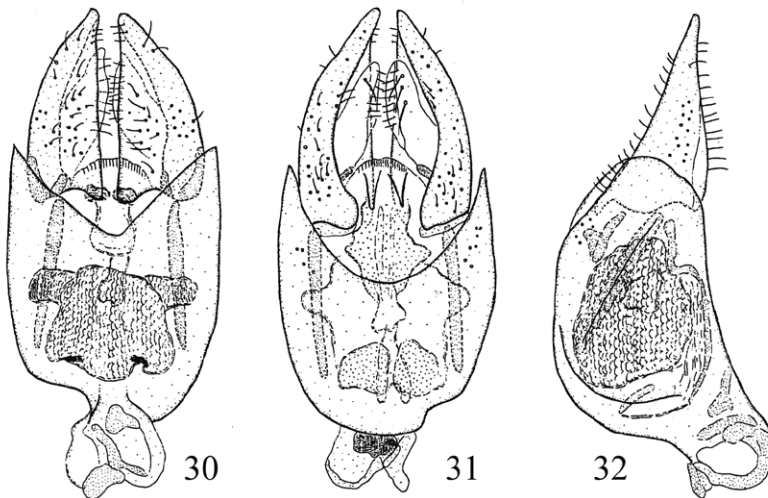


図30–32. オオヒゲブトチビシテムシ *Colon (Myloechus) hiraii* Nakane の雄交尾器 (それぞれ腹側、背側、横側)。全て Hoshina (2009) より引用。

万年前)に現在の九州と琉球列島はトカラギャップによって切り離されていたことを念頭に各種考察をすることが多いと思われる(例えば Ota, 1998; 本村, 2015). 那覇自然環境事務所が作成したパンフレットもこの数字を採用し、「前期更新世約 150 万年前にはトカラ海峡が成立していた」と紹介している(那覇自然環境事務所, 2010).

筆者が保管する中国大陸南部の *C. (M.) chenggongi* に近縁な未同定標本(本稿では扱わず)の存在や *C. (M.) hiraii* が関東以西にしか分布しないことを考えると, *Colon tametomoi* 種群は所謂南方系で, 大陸から南方経由で琉球列島に進出し, トカラ海峡成立前に九州に入り, それぞれの島嶼で種分化したと考えるのがまずは妥当なところだろう. もっとも, 木村(1996)や池原・加藤(1997)によれば, 更新世中期~後期(約 20 万年~2 万年前)には琉球列島内の各海峡は開閉を繰り返したらしいので, 海峡の幅が非常に狭い時期なら飛翔力のあるヒゲトチビシデムシが渡海することは(= *Colon tametomoi* 種群が南方から九州に到達したのは更新世中期以降)不可能とは言い切れないだろう. 現在の筆者の知見では, 中胸後側板の毛の生え際の点刻(setal socket punctures)の形態的特徴から, *Colon tametomoi* 種群の単系統性は支持され, かつ南方から琉球列島を北上したであろう程度の推論を提示するにとどめる.

ただ, *Colon tametomoi* 種群の分布域のうち台湾と奄美大島の間, つまり沖縄諸島と八重山諸島が空白であることが気になっている. 同種群が沖縄本島や西表島で単に採集されていないだけであろうか.

2) *Colon (Myloechus) hiraii* 以外の 2 種の検視標本の少なさ

オオヒゲトチビシデムシの雄後脚に著しい個体変異が見られることは既に述べた. 一方, 他の 2 種については個体変異について一切言及していないが, このことは別にオオヒゲトチビシデムシのみに種内変異が生じやすいことを保証するわけではない. 単に調べることができた同種の標本が多かっただけ, との可能性が高い. よって, 将来コクセンヤヒゲトチビシデムシ *C. (M.) chenggongi* とアマミヒゲトチビシデムシ *C. (M.) tametomoi* の十分な標本が得られたならば, この両種についてもそれぞれ個体変異が見いだせるのではなからうか. 例えば, アマミヒゲトチビシデムシの後脛節は雌雄とも棒状と上述したが, 実際には内側に大きく曲がる後脛節を持つ雄個体が発見されても不思議ではない.

アマミヒゲトチビシデムシについては日本甲虫学会会員の西川正明氏が最近筆者に未調査標本を貸与してくださった. また, 同じく本学会会員の山内健生氏は奄美諸島と琉球の間に位置する屋久島産 *Colon tametomoi* 種群の多数の標本を提供してくださった. これらの追加標本の調査の結果次第では, *Colon tametomoi* 種群の再検討を余儀なくされる場合も出てくると覚悟している. ようするに, オオヒゲトチビシデムシとアマミヒゲトチビシデムシの形質が連続し, 厳密に区別できるか否かを今一度吟味する必要があるかもしれない, ということだ.

追記

ヒゲトチビシデムシ要説の連載は今回が 6 回目である. 役立つ内容でありながら, 拙文を読みヒゲトチビシデムシの標本の提供を申し出てくださっている大変奇特な会員の方が何人かおられる. その結果, 未記載種の発見が要説連載開始後に相次いでおり, 本連載は日本産チビシデムシ亜科の総説と言うよりは中間報告に転じつつある. これら未記載種は逐次発表準備を進めており, 今後「追加記事」との形で既に掲載済みの要説内容を上書き訂正していかざるをえない事情をご了承いただければ幸いである.

謝辞

Colon tametomoi 種群の標本を提供してくださった日本甲虫学会会員の西川正明氏と山内健生氏(五十音順)に厚く御礼申し上げる.

引用文献

- Hoshina, H., 2003. Discovery of the subfamily Coloninae (Coleoptera, Leiodidae) from the Ryukyus, Japan, with description of a new species. *Elytra*, Tokyo, 31: 209–213.
- Hoshina, H., 2009. A taxonomic revision of the subfamily Coloninae (Coleoptera: Leiodidae) from Japan and Taiwan. *Tijdschrift voor Entomologie*, 152: 237–286.
- 保科英人, 2016a. 日本産ヒゲトチビシデムシ類要説 (II). さやばねニューシリーズ, (22): 1–7.
- 保科英人, 2016b. 日本産ヒゲトチビシデムシ類要説 (IV). さやばねニューシリーズ, (24): 24–27.
- 保科英人, 2016c. 日本産ヒゲトチビシデムシ類要説 (V). さやばねニューシリーズ, (25): 1–6.
- Hoshina, H. & M. Nishikawa, 2016. An additional new species to the genus *Colon* (Coleoptera: Leiodidae: Coloninae) from the Ryukyus, Japan. *Japanese Journal of systematic Entomology*, 22: 283–286.
- 池原貞雄・加藤祐三編, 1997. 沖縄の自然を知る. 築地書館. 269 pp.
- 木村政昭, 1996. 琉球弧の第四紀古地理. *地学雑誌*, 105: 259–285.
- 本村浩之, 2015. 琉球列島の生物多様性. pp. 56–63. 日本生態学会編. 南西諸島の生物多様性, その成立と保全. 南方

新社. 67 pp.
 那覇自然環境事務所, 2010. 奄美・琉球諸島の生物多様性. 島々に棲む様々な生きものたち. 那覇自然環境事務所. 7 pp.
 Nakane, T., 1982. New or little known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. XXXV. Reports of the Faculty of Science, Kagoshima University (Earth Science & Biology), (15): 101-111.
 大嶋和雄, 1980. 海峡地形に記された海水準変動の記録. 第四紀研究, 19: 23-37.
 Ota, H., 1998. Geographic patterns of endemism and speciation in amphibians and reptiles of the Ryukyu Archipelago, Japan, with special reference to their paleogeographical implications. Researches on Population Ecology, 40: 189-204.

Perreau, M., 2015. Family Leiodidae. p. 180-291. In: Löbl, I. & D. Löbl (eds.). Catalogue of Palaearctic Coleoptera. Hydrophiloidea-Staphylininoidea. Revised and updated edition. vol. 2/1. 900 pp. Brill, Leiden, Boston.

(2017年6月12日受領, 2017年6月17日受理)

【短報】奄美大島のカエルが食べた甲虫類

奄美大島は、南西諸島あるいは奄美群島の主要なカエル類の生息地となっており、カエル類の多様性も非常に高い。筆者の一人亙は2003年から2006年にかけて、奄美大島において、大型のカエル類3種、オットンガエル *Babina subaspera*、アマミシカワガエル *Odorrana splendida*、アマミハナサキガエル *Odorrana amamiensis* の生息状況と食性の調査を行った。この中でオットンガエルの食性については、サワガニ、マダラカマドウマ、オオゲジ、ミミズ、ナメクジ、マイマイなどが主な餌であることを報告している(岩井・亙, 2006; 岩井ら, 2006; 亙ら, 2007)。しかし、その他の内容物が1/3以上あり、これについては触れられていない。亙は胃の内容物から、形が分かる甲虫類を抜き出し、横原がそれを同定した。本報告ではその甲虫類の同定結果を報告する。ただ、調査地域は奄美大島全域にわたり、保全上の観点から、ここでは採集地は特定しない。カエルの採集者はすべて亙である。

●オットンガエル

奄美大島、加計呂麻島と枝手久島だけに分布する。
 コガネムシ科 Family Scarabaeidae
 アマミビロウドコガネ *Maladera amamiana* Nomura (図3)
 1 ex., 18. X. 2005.
 コメツキムシ科 Family Elateridae
 タカハシクシコメツキ *Melanotus (Melanotus) takahashii* Kishii (図7)
 2 exs., 12. VI. 2006.
 ゴミムシダマシ科 Family Tenebrionidae
 アマミオオニジゴミムシダマシ *Hemicera nodokai* Nakane (図8)
 1 ex., 13. X. 2005.
 オオシマナガキマワリ *Strongylium oshimanum* Fairmaire (図9)
 1 ex., 14. VI. 2006.

●アマミシカワガエル

奄美大島だけに分布する。
 オサムシ科 Family Carabidae
 ハラアカモリヒラタゴミムシ *Colpodes japonicus* (Motschusky) (図1)
 1 ex., 15. VI. 2006.
 コメツキムシ科 Family Elateridae
 ミヤケオオサビキコリ *Agrypnus (Agrypnus) miyakei miyakei* Ôhira (図5)
 1 ex., 12. VI. 2006.
 アマミアラハダチャイロコメツキ *Reitterelater amamiensis* (Ôhira) (図6)
 1 ex., 24. V. 2004.
 タカハシクシコメツキ *Melanotus takahashii* Kishii (図7)
 1 ex., 12. VI. 2006.
 カミキリムシ科 Family Cerambycidae
 リュウキュウクリイロシラホシカミキリ *Nanohammus oshimanus* Breuning et Ohbayashi (図11)
 1 ex., 23. V. 2006.

●アマミハナサキガエル

奄美大島と徳之島だけに分布する。
 オサムシ科 Family Carabidae
 アマミモリヒラタゴミムシ *Colpodes amamioshimensis* (Habu) (図2)
 1 ex., 30. I. 2006.
 コガネムシ科 Family Scarabaeidae
 フタスジカンショコガネ *Apogonia bicarinata* Lewis (図4)
 1 ex., 26. V. 2006.
 カミキリムシ科 Family Cerambycidae
 オオシマハネナシサビカミキリ *Pterolophia (Pseudale) oshimana* Breuning (図10)
 1 ex., 26. V. 2006.
 ゾウムシ科 Family Curcurinidae
 ヒメクチカクシゾウムシ *Catarrhinus umbrosum*